

# 一宮発 純国産ツイード

セーターやスーツに欠かせないウール(羊毛)。国内で流通する衣料品に使われる羊毛は、ほぼすべてが海外産だ。だが北海道を中心に食用や観光にヒツジを飼う牧場はあり、暑い夏を迎える前に毛刈りをする。一宮市の老舗毛織物メーカー「中外国島」は、その毛に目を付けた。

「こわごわした手触りだが、いだ糸で織られ、分厚く丈夫ふんわり感があり、いかにも暖かそうだ。」

中外国島が製造したツイード生地。北海道で刈られたヒツジの毛を使い、紡績、織布と生地づくりの工程をすべて国内で手がけた。「ごく少量の個人取引を除き、純国産のツイードは、他にないのではないか」と伊藤核太郎社長(49)は胸を張る。

スコットランド発祥とされるツイードは太い羊毛から紡



①ツイードを持つ伊藤核太郎社長。洗った羊毛を紡績会社で糸にし、生地に織った②中外国島が今年、国内で買い付けたヒツジの原毛=いずれも一宮市

## 老舗メーカー、食用羊を利用

が70年には約2万2千頭にまで減った。

2017年現在で、北海道で全国の6割にあたる約1万2千頭が主に食用として飼われている。これでも北海道で人気のジンギスカンとして食べられている羊肉をまかなうには程遠く、ほとんどは輸入肉だ。中国1億6千万頭、豪州7千万頭と、そもそも飼育規模が違っ。

世界的に見ればわずかとはいえ、国内で飼育されるヒツジも暑さ対策での毛刈りが必要だ。しかし、刈った毛の大半は廃棄されている。中国での需要が伸び、羊毛の国際価格が上がるなか、中外国島が注目したのは、こうした「国

## 毛刈りは北海道 織布は自社で

産一の原毛だ。食用と観光に数百〜1千頭を飼育する北海道の牧場から昨年、毛を買い取った。現地で毛刈りに立ち合った伊藤さんは「海外と比べると牧場は小さく、原毛の利用まで手が回っていなかったようだ。愛着をもってヒツジを育てる人たちを見て、ぜひ使いたくかった」と言う。

縮れが強くて空気を多く含む毛質のヒツジが多く、この毛で織るのに適しているのがツイードだったという。

牧場で刈った原毛を化学薬品を使わずに洗い、大阪府の会社に持ち込んで糸にした。一宮市の自社工場で織布の試作を重ね、「完全国産のツイードが1月に出来上がった。

原毛の量が限られているので、初年度に生産できたのは、ジャケットにして約400着分のベージュとグレーの生地。東京の百貨店、名古屋市のオーダースーツ店「テラー神谷」などで取り扱われ、一宮市にある中外国島の直営テラーでは、ジャケットで約10万円から、コートで約13万円から仕立てられるという。

中外国島は今年度、愛知県、宮城県などの牧場にも原毛の買い取り先を広げた。初年度の4〜5倍の国産羊毛を仕入れ、ツイードを増産するという。

(荻野好弘)